

# 仙林寺だより

NO. 65  
編集・発行  
松田正貴

## 行事報告

### 寺小屋餅つき・ピンゴ大会



二十七日(水)歳末恒例の行事、餅つきを開催しました。予定を大きく上回る三十名の参加を得て、天候の不安など吹く風と言った様子。境内では一足先にお正月が来たかと思う程の賑わいを見せました。内訳をみると、この日の為に遠くポルトガルから参加したペドロソさん。芸能界からは、田代洵子・ゴージャス松野両氏が応援に駆けつけました。餅つきの後に一曲披露願いたいとの思いも虚しく、子供達の奇声、氣勢?に圧されてそれぞれではありませんが、張り切っていました。お餅四升もあつという間に、ピンゴゲームは、

た(大人が...)お餅四升もあつという間に、ピンゴゲームは、景品の提供だけは自主というわけにはいかないようです。どちらかといえばお父さんやお母さんが喜びプレゼントだったかもしれませんが、年の最後にほんの少しの親孝行ということ。いつもながら、ボランティアのご父兄の皆様、また、餅米を布施頂いた田代さん田子さん、只々感謝です。来年もまた皆様のご協力を頂きながら地域力向上の一助となるように楽しみながら励みたいと思っております。変わらぬご支援をお願い致します。

### 大晦日

月遅れの炉開きか? お参り 除夜の鐘 焚き火にミカン+お酒 or 甘酒。といういつもの流れに、今年はおもう一(ひと)行程加わ

りました。観音堂を開放し、炉の切り炭に火入れをしました。今や貴重品となった炭の調達、またこちらも人間国宝並みに貴重(少な)火守り役には、寺子屋協力員としてお馴染みの宮内氏(福島市)があたりました。取り八分に仕事二分、新規事(寺)業(プロジェクト)の成否は計画(プランニング)で決まる。氏の友人谷口大工さんを巻き込んで(手間代を布施していただきました)の自在鍵や畳寄せの取り付け作業も順調に進み、いよいよ当日を迎えます。肝心の切り炭は、市内霊山で焼かれた檜炭を使用、鉄瓶で沸かした湯でいれたお茶は一味違います。炉を囲んでのひと時も「目のやり場が決まっから落ち着くんだでない!」さすが火守りのひと言、哲学的です。今度は、破魔矢でも配られつけない「早速次のプロジェクトに向けてのプランも進行し始めているようです。一年後の大晦日、乞うご期待。

### 坐禅会茶話会(行く年来た年)

二十九日が平成十八年度の最終坐禅会、一月五日が十九年度の初顔合わせ。ということ、朝のおつとめの後、恒例の茶話会を催しました。新入会員三人を含む十六名が参加、行く年を惜しみ、それぞれの一年を振り返りました。出会いにより新たに坐禅を始められた方あり、また身体的理由で会を去ることになった方あり、それぞれのご縁が、悲しい別れであり、嬉しい仏縁であること。まさに悲喜こももです。因みにこももとは地藏十輪経の中に「平等心をもて更(コモ)モ(モ)相利樂し、安樂せしむ」とあるように、すべては普く平等に訪れるものと心得ることで、我が身の不幸を恨む事も無く、また人の幸せを羨む事も無い、そのように考える事が出来れば、こもももに利益された身を楽しみ、真の安樂の境地に辿り



ました。観音堂を開放し、炉の切り炭に火入れをしました。今や貴重品となった炭の調達、またこちらも人間国宝並みに貴重(少な)火守り役には、寺子屋協力員としてお馴染みの宮内氏(福島市)があたりました。取り八分に仕事二分、新規事(寺)業(プロジェクト)の成否は計画(プランニング)で決まる。氏の友人谷口大工さんを巻き込んで(手間代を布施していただきました)の自在鍵や畳寄せの取り付け作業も順調に進み、いよいよ当日を迎えます。肝心の切り炭は、市内霊山で焼かれた檜炭を使用、鉄瓶で沸かした湯でいれたお茶は一味違います。炉を囲んでのひと時も「目のやり場が決まっから落ち着くんだでない!」さすが火守りのひと言、哲学的です。今度は、破魔矢でも配られつけない「早速次のプロジェクトに向けてのプランも進行し始めているようです。一年後の大晦日、乞うご期待。

着けるのかもしれない。「昨日ありしは今日は夢」と申します。昨年坐蒲を並べて坐っていた仲間が今年はいない。人との別れもまた無常、無常だからこそ「今」の一瞬がより輝きを増すのかも知れません。禅の修行者読本『正法眼蔵随門記』の中に、「学道の人、すべからく寸陰を惜しむべし。露命消えやすし、時光すみやかに移る。暫く存ずる間に余時を管ずる事無く、ただすべからく道を学すべし」とあります。学道の人とは、仏道修行の人、仏道修行とは禅にあつては坐禅にほかなりません。あつという間に過ぎ去る人生、余時に惑わされ出会い無く過す月日では、こももも相利樂もかないません。別れと出会いを思い「今」という時を大切にしたいものです。積み重ねの集大成を一年の計としたいものです。

### ひとつと「命」

#### 平成十八年度最終坐禅会の話から

平成十八年の一文字が「命」に決まったとの事です。天皇家に親王がご誕生との事、新しい命を祝う意味合いが大きいのでしよう。ただ、今年の報道を振り返ってみますと、まるで人の命の重さが以前と比べて軽くなつてしまつたように錯覚してしまいがたな話題に、心が痛む一年だつたような気がします。決して明るい命の話題だけではなかつたことに、あらためてこの一文字の重さを感じております。さて、この「命」、道元禅師様の目線で見るとどのように見えるのか、お言葉の中にと探つて見たいと思ひます。修証義の中に、「身すでに私にあらず、命は光陰に移されてしばらくも停めがたし、紅顔いづくへか去りにし尋ねんとするに蹤跡なし、つらつら観ずる所に往事の再び逢うべからざる事多し」とあります。「身すでに私にあらず」自分の持ち物とばかり思つていたこの身が実は自分のものではないなかつた。なぜならば、「命は光陰に移されてしばらくも停めがたし」自分の自由になるも

のであったなら、私がつもつとも輝いていた若かりし頃の自分でいらればとの願いも虚しく、現実はその思いとは関係なく、月日の経つにしたがつてどんどん年をとっていく、一瞬たりともとどまってはくれない。「紅顔いづくへか去りにし尋ねんとするに蹤跡なし」あの若き日の自分はたしかにあったのに、どこに行つてしまつたのだろうか、行き先を探しても跡形もない。「つらつら観ずる所に往事の再び逢うべからざる事多し」よくよく考えてみても往時の姿は二度と帰ってくるものではない。ここで、命が自分の物でない事実を知る事で、借り物の命を大切に使用していただき、その時が来ればお返しするだけ、そのように考えれば無駄遣いなど決して出来ない大切な思いにつながるものでしょう。

閑話休題  
ただ、この文を見ると、何やら若いときだけが幸せで、年を重ねる事が辛く寂しい出来事のように書いてあるとも感じますが、実はそうではありません。命の積み重ね、命の変遷があるからこそ、その営みの中に菩提心との出会いがある。ここでこの菩提心とは、命を大切に思う心、私達坐禅の者にとつては「坐禅でもしてみようか」という仏の世界からの呼びかけに素直に心へと繋がって行くのではないのでしょうか。そして、素直に心へは、ただ若ければいいというものではなく、年をとつてしまつたから遅いというものではないとも考えらる。また「四十二章経」というお経の中に、仏とある沙門（出家者）との問答が載つております。  
仏、沙門に問う、「人命いくばくの間に在る」。  
応えて曰く、「数日の間なり」。  
仏曰く、「汝まだ道を知らず」と。  
また、一の沙門に問う、「人命いくばくの間に在る」。  
応えて曰く、「飲食のあひだなり」。  
仏曰く、「汝まだ道を知らず」と。  
また、一の沙門に問う、「人命いくばくの間に在る」。

る」。 応えて曰く、「呼吸の間なり」。 仏曰く、「善いかな、汝、道を知れり」と。

無常の中を生きる私達の生命が、一息一呼吸のなかにある事をこのお経は教えてくられております。 禅師様はまた、無常迅速、生死事大というなり、返す返すもこの道理を心に忘れずして、ただ今日今時ばかりと思ふて時光を失わず、学道に心をいれるべきなり」とお示しです。 今日今時、今この時がいかに大切であるのか、一瞬の中に永遠が入る真実（而今の現成）をお伝えです。 一呼吸一呼吸を大切に、呼吸になり切る事が坐禅の本分です。 その様に考えるとき、坐禅は命そのものとの心の決着を見ることができそうです。 一瞬の命を生きる坐禅です。 来年も心して坐りたいものです。

### ひとこと 「亥年に因み」

ご存知「西遊記」に出てくる豚の妖怪と言えば猪八戒（ちよはつかい）でしょう。 天の川の水軍を率いる天蓬元帥が不祥事で下界に追放され誤つて雌豚の胎内に入つて生まれたと設定です。 ここで、何で豚なのに猪（ちよ）なのか、実は漢字の本場中国では「猪」と書けばブタを意味するのだそうです。 さて、このイノシシ、



仏教との関連素材？を調べてみると、イノシシを使徒とする天部の仏、摩利支天（まりしてん）があげられます。 摩利支とは日と月つまり太陽や月を意味し転ずるに陽炎・威光に準えられるとの事、「摩利支菩薩陀羅尼經」には「摩利支天を念ずれば人から見られず、捕らえられず害されぬ」とあります。 その様な理由から戦国時代には護身、陰身のご利益があるとされ、武将がその像を肌身に付け合戦に臨んだとされており、最近では大河ドラマ「風林火山」の中で、主人公である

山本勘助の念持仏として登場しております。 その他、前田利家、上杉謙信、武田信玄、時代下つて大石内蔵助など多くの武将が軍神として信仰していたとの事です。 また、易学で言う丁亥（ひのと・い）年生まれの方は、陽炎のようにつかみ所なく、太陽と月に例えられる両極端な性格？さにあらず、忍耐強く正直で何事にも全身でぶつかりやり遂げる力を持つていとされます。 只、氣立てが優しく面倒見が良いだけに人にだまされ易いので注意が必要とのことです。 ご用心を！ 次に碩学白川静先生のお力をお借りして漢字の中に意味を探つてみたいと思ひます。「亥」に「木」を組み合わせて「核」となり、物事の中心を意味し、「亥」に「骨」を組み合わせると「骸」となり骨が枯れて冬ごもりしている様、更に亥年が十二支の締めくくりとなり、子年の始まりを迎えるところから、新たな循環への出発を見据え、冬籠りの中に十分な栄養を蓄える年とも考えられそうです。 とここで、陰陽五行説による干支（えと）とは干と支、つまり十干（じつかん）十二支を見る事で始めてその意味が成り立ちます。 正式な干支によれば今年（丁亥（ひのとい））、中国では六十年に一度の特に重要な年として「金亥」と呼ばれるそうです。 万物を司る陰陽、日と月の意味を合わせ持つ天部の仏、そしてまた威光に満ちた軍神としての守護神。 何やら計り知れない猪パワーに圧倒されそうです。 ただ、力行使するには自制や忍耐そして正しい方向性が求められる事は昨今の国際情勢をみても明らか、そのような時にこそ、陽炎のように目には見えない存在を思い浮かべ、実は見られていない存在を想定することが大切なのかも私達の存在を想定することが大切なのかもしれません。 摩利支菩薩信仰の功德は、その起爆的なエネルギーの先を方向付けてくださるところにあるのかもしれない。